

平成 15 年度病害虫発生予察特殊報第 1 号

平成 15 年 10 月 15 日

発表：福島県病害虫防除所

害虫名 トマトハモグリバエ (*Liriomyza sativae* BLANCHARD)

1 発生の状況

(1) 平成 15 年 8 月 27 日、福島県農業試験場は原町市のハモグリバエ類が多発した雨よけ栽培トマトほ場から採取された成虫の同定を横浜植物防疫所東京支所 岩泉連氏に依頼した。その結果、採取された成虫はトマトハモグリバエ (*Liriomyza sativae* BLANCHARD) と同定された。

また、9 月 2 日に病害虫防除所と農業試験場とで、発生ほ場周辺の寄生状況を調査したところ、きゅうりでも発生が確認された。

(2) さらに、病害虫防除所が各農林事務所の情報に基づき、ハモグリバエ類の寄生が多いトマトほ場を中心に調査を行ったところ、5 地点 5 町村 (桑折町、玉川村、中島村、表郷村、南郷村) においてトマトハモグリバエの発生が確認され、県内に広く分布していることが確認された。

2 形態

(1) 成虫は、体長 1.3mm ~ 2.3mm、翅長 1.25mm () ~ 1.7mm () で、大きさは同じ *Liriomyza* 属のナスハモグリバエ、マメハモグリバエとほぼ等しい。体色も概ねナスハモグリバエ、マメハモグリバエと同じであるが、外頭頂剛毛 (vte) の着生部が黒色、内頭頂剛毛 (vti) の着生部が黒色と黄色の境界部であることが前 2 種との識別点となる (図 1)。ただし、本種の体色は変異が大きく、正確な同定には雄交尾器の形態観察が必要である。

(2) 幼虫は淡黄色のウジ状で、3 齢幼虫の体長は約 3mm、後部気門小孔は 3 個であり、マメハモグリバエと共通するが、後部気門小孔が 7 ~ 12 個のナスハモグリバエとは識別が可能である。

3 生態

(1) 本種はナス科、ウリ科、キク科、マメ科など広範な植物に寄生し、特にウリ科での被害が激しい。

(2) 幼虫は葉に不規則な線状潜孔 (えかき症状) を形成し (図 2)、老熟幼虫は潜孔の末端から脱出し、土中で蛹化する。25 条件下でインゲン豆を寄主とした場合卵から羽化まで 17 日間を要する。本県の露地越冬の可能性については不明である。

4 当面の対策

(1) 購入育苗を使用する場合には、寄生が認められる苗は適切に処理する。

(2) 自家育苗を行う場合には 1mm 目合い以下の防虫ネットで覆い、成虫の侵入を防ぐ。

(3) 摘葉や収穫後の残渣は、発生源となるので、適切に処理する。

- (4) ほ場および周辺の除草を行い、ほ場衛生につとめる。
- (5) 発生ほ場においては周囲への分散を防止するため、栽培終了後にはハウスを密閉して蒸し込みを行い死滅を図る。
- (6) 本種に対し使用できるトマト、キュウリの登録農薬を表1に示す。また、マメハモグリバエに準じた薬剤で対応できるとの報告もある。

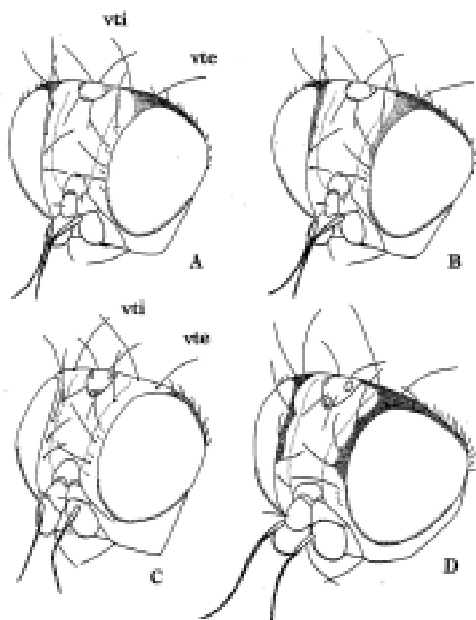


図1 *Liriomyza* 属の頭部 (岩崎原図)

A: トマトハモグリバエ *L. sativae*, B: トマトハモグリバエ (暗色)

C: マメハモグリバエ *L. trifolii*, D: プジョウハモグリバエ *L. brassicae*.

(岩崎ら (2000) 植物防疫, 54(3)より)



図2 夏秋雨よけ栽培トマトにおけるトマトハモグリバエの加害状況

表1 トマト、キュウリにおけるトマトハモグリバエの防除薬剤

作物名	対象害虫名	薬剤名	使用濃度・使用量	使用時期	使用回数
トマト	ハモグリバエ類	トリガード液剤	1000倍	収穫前日まで	3回
	ハモグリバエ類	スピノース顆粒水和剤*	5000倍	収穫前日まで	2回
	ハモグリバエ類	ハチハチ乳剤*	1000倍	収穫前日まで	2回
	トマトハモグリバエ	アクタラ粒剤5*	株当たり1g	定植時	1回
	ハモグリバエ類	スタークル粒剤*	株当たり2g	定植時	1回
	ハモグリバエ類	アルパリン粒剤*	株当たり2g	定植時	1回
きゅうり	トマトハモグリバエ	カスケード乳剤*	2000倍	収穫前日まで	4回
	トマトハモグリバエ	スピノース顆粒水和剤*	5000倍	収穫前日まで	2回

注) *は蚕等への毒性が強いため、合成ピレスロイド系殺虫剤等の安全使用に関する指導方針に従うこと。

ハモグリバエ類に対して薬剤防除の効果が見られないなど、本種の発生の疑いがある場合は、病害虫防除所、農業試験場までお問い合わせ下さい。